

# 選評

## 濱住真有「中国山水画受容の様相 池大雅筆『白雲紅樹図』をめぐって」

本論文は、池大雅筆「白雲紅樹図」(萬野美術館旧蔵)(以下、本作例と呼ぶ)をとりあげ、「白雲紅樹」という画題、様式に注目し、中国絵画からの影響関係を詳細に論証したものである。

まず、画家自らが画中に記した「白雲紅樹」という画題について、大雅自作とされる漢詩との関連を指摘する従来の説に対し、日本のみならず中国・唐代にまで遡って漢詩文中の使用例を見出し、高山での見事な紅葉を意味する語として「白雲紅樹」という言葉が定着していたことを指摘する。

つぎに、「白雲紅樹」という画題で描かれた先行作例を渉猟し、明末清初の画家藍瑛(1585~1664)およびその周辺の画家による作例を見出し、本作例との共通性を検証している。とくに、北京故宮博物院蔵の藍瑛筆「白雲紅樹図」において本作例と同様に画題が隸書体で記されることに注目し、大雅が同種の先行作例に倣った可能性を指摘する。また、藍瑛およびその周辺画家は、梁代の張僧繇に倣ったとする青緑山水図を盛んに描いており、こうした作例が本作例の成立の手がかりになった可能性にも言及している。

従来、藍瑛の作品が日本に移入された時期は天明期(1781~1789)とされ、関東の渡辺玄対・谷文晁らへの影響を与えたことが指摘されていたが、最近、明和4年(1767)に木村蒨葎堂が藍瑛作例を模写した作例が見出され、本作例が描かれた頃にすでに日本に入ってきていたことが確実にされた。こうした背景を受けて、大雅が藍瑛作例に接した可能性があることを指摘した上で、本作例と藍瑛作例との様式・技法の関連性の高さを多方面から検証している。

最後に、付属書状から、春2月に紅葉を主題とする本作例が描かれた理由を、中国・唐代の詩人杜牧の詩を踏まえたためであるとし、このことは「白雲紅樹」という主題を当初の鑑賞者たちが共有できる環境がすでにあったことを示しているとする。

一つの作品の表現と主題の意味を徹底的に掘り下げ、藍瑛に代表される明末清初の復古的青緑山水の影響が従来考えられていたよりも早くあったこと、また古典詩文とそのイメージを合わせ学ぶ大雅の作画姿勢の一端を具体的に示し、論証した点が、新知見として特に高く評価される場所である。論文としての形式・記述も完備しており、作品をめぐって多方面から正統的な手法で論述した構成にも充実感がある。さらに、中国・梁代の張僧繇にまで起源を尋ねる壮大さや、今後関連する多くの研究者に有益な示唆を与えることになると予想される情報量の多さも特筆される場所である。

こうした観点から、本論文は『美術史』論文賞受賞に値すると判断された。